



赤羽駅からは垂直にアーケードを通り、その切れ目を左折して住宅街を通り荒川知水資料館までの約1.5kmの道を散策しました。その道は何の変哲のない道ですが、今赤羽は気楽に安くお酒が飲め、またおでんの町として人気を博しております。

下の写真は、荒川知水資料館の周辺を示しております。



荒川治水資料館の近くには、荒川の治水の要である新旧岩淵水門(下記中、左写真)があります。私の時代には、赤門である旧岩淵水門が、その対岸の土手の先端と広場で繋がっており、水門として役目を果たしていました。赤門と野新田の北端にある母校中学校との間の往復の3kmがランニング大会のコースでした。

上記写真のAには、昭和13年～18年の5年間、荒川土手で草刈競技が行われていた示す碑があります(下記右写真)。現在の全国高校野球選手権さながらの全国的行事で、草刈日本一の栄冠を争ったそうです。碑文には「農民魂は 先ず草刈から」と記されています。



荒川知水資料館(下記左写真)では、ガイドさんの説明を受け、下町の治水管理している岩淵水門の役割、水害対策、荒川の歴史・意義などを勉強しました(下記中写真)。荒川の治水は、江戸市街地を洪水から守るためといわれている日本堤や隅田堤の築堤から始まりました(下記右写真)。



明治時代には洪水が10回以上発生し、その中でも特に、甚大な被害をもたらした明治43年の洪水を契機として、荒川の洪水対応能力を向上させるために荒川放水路の計画が原田貞介氏に策定され、明治44年に着手し、昭和5年に完成しました。工事はパナマ運河建設に携わった青木士氏の指揮によって行われました。赤水門は、関東大震災にもびくともしなかったそうです。それまで蛇行していた荒川は、岩淵水門から基本的に直線的に皇居から離れるように今までの荒川と荒川放水路に分かれました。荒川、荒川放水路は、今はそれぞれ名前を変えて墨田川、荒川と呼ばれています。

その後、新岩淵水門から荒川、墨田川の間を、遠くスカイツリー(下記左写真)を眺めながら環七までのんびり(下記中、右写真)と2km程と散策しました。荒川側の河川敷には、昔は相撲や俳優がよく来た都民ゴルフ場があります。



その後、私の当時の家の前へと迂回しながら、環七の野新田(最初の写真参照)バス停まで0.4 km程歩きました。当時環七は開通しておらず荒川、墨田川に架かる橋もなく静かで広い遊び場所でした。

その後バスに乗り関東厄除け三大大師の西新井大師(下左写真)に行き、参拝しました。お堂の前に新車が整然と並んでおり(下記中写真)不思議に感じましたが、車と共に交通安全に祈願を受けているとのことでした。この祈願は、結構頻繁に行われているようです。昼食は、当初旧岩淵水門の木陰で取る予定でしたが、雨後の地面の状態を考え、西新井大師で取るという遅い昼食(下右写真)となりました。空腹のため西新井大師の参拝はやや短めとなりました。昼食時の歓談では、参加者からは、さわやかな秋風の吹く荒川土手、下町西新井大師への散策は未知への遭遇感もありとても良かったとの評を得て、世話人としては少し報われた感がありました。

帰路は、東武西新井大師駅から、東武線経由、武蔵野線新秋津駅での解散となりました。



参加者：青木(淳)・阿部・大内・倉田・高橋(正)・富沢・同夫人。

以上 写真：大内一男、富澤文雄 記：富澤文雄